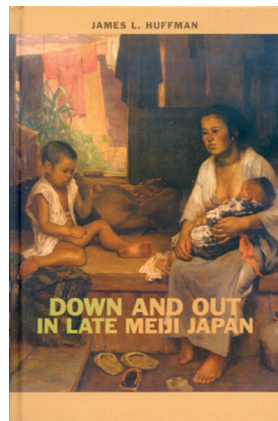


ジェイムズ・L・ハフマン

## 『明治後期日本の下層社会』

James L. Huffman, *Down and Out in Late Meiji Japan*

吉村 智博



University of Hawai'i Press, 2018

言語論的・物語論的転回以降の歴史学界では、歴史物語論争や歴史修正主義などの問題が惹起したものの、構造主義の後景に追いやられていた「主体」の復権（パーソナル・ナラティブ、エゴ・ドキュメント、ライフ・ヒストリーなど）に回路が切り拓かれ、何よりも民衆社会史研究の深化の可能性があらためて提示されている。『現代歴史学への展望——言語論的転回を超えて』（岩波書店、二〇一六年）を著した西洋史学者の長谷川貴彦も「物語論的転回201」（『思想』一一二七号、二〇一八年）で指摘しているように、都市社会史研究の分野においては、日常的慣習の構造に規定されながらも人々が自身の行為あるいは物事の見方を方向づける能動的側面（P・ブルデューのいう「プラティーク」）を有することが再度、認識され共有されている。

こうした可能性としての社会史の領域において、本書は、明治後期の都市下層社会の諸関係を人々の日常的営為に着目して具体的に描き出すことを目的に、資料を博搜して論じた作品である。著者のジェイムズ・L・ハフマンは、これまでも明治期の日本国内のメディアを詳細に解析するなかで、その言説から創造される公共性の問題などを明快に論じてきた（*Creating a Public: People and Press in Meiji Japan*, University of Hawai'i Press, 1997）。本書もまた資本主義社会において展開される都市下層に生きる人々の生活誌（労働、群衆、祝祭、移動など）の諸相に注目し、その動態的・主体的な営為をトータルかつダイナミックな視点から描き出し、さらに日本国内外の「移動」というグローバルな構造にも焦点をあてて全体像を提示しようとする意欲的な作品である。

本書の構成を概観するために、目次をまずは列挙しておこう。「序論」「1 スラムの形成…下層への移動と定着」「2 賃労働…製造業と建設業」「3 賃労働…運送業と使用人」「4 生涯…家庭内」「5 影と嵐…忍耐」「6 太陽の輝き…人生の抱擁」「7 農村における貧困…比較検討」「8 貧困の拡大…ハワイの砂糖農園」「結論」。

論述の根拠としている資料は、松原岩五郎『最暗黒の東京』（一八九三年）、横山源之助『日本の下層社会』（一八九九年）、あるいは農商務省『職工事情』（一九〇三年）をはじめとするルポルタージュおよび社会調査書のほかに、『時事新報』『国民新聞』『萬朝報』『朝野新聞』など新聞ジャーナリズム、そして作家の文芸作品であり、これらの資料分析は、著者の真骨頂ともいえる。具体的な叙述の対象となっているのは、東京や大阪などの大都市圏で燐寸<sup>マッチ</sup>工場、紡績工場、手仕事、人力車夫、マツサージ師などの生業を営む多様な貧民、建設現場などでの日雇労働者、さらに皮革産業などに携わる部落民などである。ジャーナリズムを通して、時に個々の貧民の思考や生活実態にまで筆を走らせる。一方、貧困な養蚕農村から大都市へ流入する貧困層をめぐる移動という国内動向、さらにハワイへの移民（プランテーションで働く貧しい人びと）など海外動向についても叙述をおろそかにすることもない。そこには、貧しくも旺盛な生業に勤<sup>いそ</sup>む人々の姿が動態的に

描かれている。都市下層の生活誌を多様な社会層の日常的営為から照射しようとする総合的で俯瞰的な視座の取り方は、昨今みられる、社会空間構造に関する狭隘で些末な分析に偏りがちな一部の都市社会史研究に一石を投じるにもなるろう。

本書に通底する視点を最も象徴しているのが、次のフレーズである。「ものづくりに携わった貧民たち——工場労働者であつても建設現場労働者であつても——が下層社会の生活について私たちに伝えている最も大切なことは、日本の近代化への進展においては、歴史的な調査では示されない暗黒の側面があるということである」(p. 67)。

明治日本の都市下層社会が労働をしてなかつたとする貧民社会に対する一種のステレオタイプな虚像を、調査書類だけに依拠することなく綿密な資料の分析によつて打破することで得られる研究成果は、現代社会の貧困問題についても大いなる示唆を与えてくれる（たとえば、「結論」において論じられている現代日本の社会福祉セーフティネットの問題など [p. 265]）。歴史研究の成果によつて照射され得る現代社会の課題（ホームレスやワーキングプアに対する社会保障制度の実態）もまた重要なものばかりである。

こうした下層社会に内在あるいは外在する諸問題を日本の近代化過程にそくして解明した本書ではあるが、見落とされている点も少なくない。これまで都市下層社会研究の一端を担ってきたと

自負している評者の視点から具体的に列挙すると次のようになる。

① 窮民、部落民、日雇労働者が一括りに「貧民」とされていて、相互の関連性が言及されていない。たとえば、部落民の一部に特有な皮革業について、その概要には触れられているが、そこまわりつく触穢観しつたいくわんや貴賤観きせんくわんによって刻印される固有の部落差別についてはまったく意識されていない（とくに「そうした状況をもたらししたのは？」での冒頭の記述「p.28」）。それゆえ、被差別民の間で取り結ばれる関係性や差別の相互規定性については説明されておらず、複層的な「貧民」の実態がやや単純化されすぎているように思える。被差別民相互の関係については日本国内でも緻密な実証研究がすでに多く発表されており、そうした研究への一定のコメントと批判も欲しかった。

② 近代都市下層社会に関する一九九〇年代以降の重要な研究についてはほとんど言及されおらず、そこから導出された実証的な論点もまったく組み込まれていない。都市下層社会の歴史的な解明にあたって避けて通れない差別への射程は、すでに一九八〇年代以降に着手されている（本書では、都市の形成と社会的矛盾の生成に着眼した中川清による生活構造論には繰り返し触れられている）。さらに、二〇〇〇年以降には個別の差別問題からのアプローチが進展し、都市下層全般にも目配りした研究が実証的に蓄積されていく。同時に日系移民問題など海外との関連にも関心が

集まり、多くの近代史研究者によって実証研究が蓄積されていく。

この点へのコメントがないのも残念である。総じて本書では、日本における近年の豊饒な都市下層社会研究の成果にはほとんどといてよいほど言及されていないのであるが（もとより過去の基本文献には言及されているが）、その要因は、どこにあるのだろうか。日本における研究情報の公開や研究成果の発信といった点にあるのか、あるいは、英語圏における日本語文献に対する参照度合いといった方法論の相違なのか、はたまた著者の視座ゆえなのか、俄かに判断しがたい。

③ 貧民が糊口を凌ぐ重要な専門性を有した芸能（とくに門付芸や大道芸など）や宗教（辻占い・歴代など）あるいは「やくざ」や「売春婦」（要するに暴力や性の問題）についてはまったく取り上げられておらず、貧民の職業がマツチ、ガラス、工場労働、人力車夫など、いわゆる統計上で明確に分類されているものに限られている。このことは、筆者の依拠する資料が、新聞資料はじめ横山源之助や松原岩五郎などのルポルタージュ、あるいは『職工事情』など殖産興業政策の延長上に立ちあらわれた職工の労働実態Ⅱ社会問題への改善などをめざした社会調査に限られているからであろう。ただし、生産・流通部門から独立して営まれる多種多様な生業についてどのようにとらえるかは、本書だけではなく日本の都市下層社会研究全般に問われている課題でもある。

④本書が対象とする一八〇〇年代後半から一九〇〇年初頭は、いわゆる世紀転換期である。国民国家論の見地からすれば、この時期は、日清戦後経営および日露戦後経営を経験して、日本社会に社会ダーウィニズムなど人種論、血統論が流布していく時期と合致している。そうしたテキスト（言説）などを背景にスラムや部落などに対してあらたな差別の指標となる「細民」「特殊（種部落）」などが登場してくるが、本書ではこうした社会状況についてはほとんど触れられていない。貧困へのアプローチという明確なパースペクティブは随所に垣間見えるが、当該社会における差別構造といった視点はかなり弱いように思う。

⑤最後に、本書の対象時期が「明治後期」という設定であることからすると、やや的外れで無いもの物ねだりとも思われるかもしれないが、当該期と近世後期（江戸時代）や近代初期（明治前期）との相違点が明確でないことである。窮乏する農村から都市への流入は近世にも存在したし（いわゆる「帳外れ」など）、木賃宿などでの「口入」<sup>くちいれ</sup>によって商家へ奉公したり、浮浪状態で都市に滞留する場合は「野非人」狩りなどによって「抱非人」<sup>かかえびにん</sup>（「長吏」<sup>ちやうし</sup>とも）の手下へと編入されたりすることもあった。また、近代初頭には、そうした被差別民は司法組織（官僚機構）へと再編されていき、その過程で被差別民が排除（とくに警察機構からの疎外）される事態が生起する。断絶した時間認識よりは前時代の

要素がいかにして当該期へ組み込まれていくかという視座の方が、歴史的考察には有効であろう。時代通底的な要素・要件の変容や持続を比較検討することによって、研究対象に設定した時期の固有性や独自性がかえって明確になり、そうした性格の歴史的転換点を説得的に説明することにもなる。前後の時代を射程に入れた見取り図も概略でもよいので欲しかった。

以上、意欲的作品に接したことで抱いた疑問を羅列してみたにすぎないが、ここに列挙した課題は、私も含め日本の都市下層社会研究者もまた負うべきものであることに相違ない。本書の成果をいかに批判的に継承していくかといった宿題は、まさに私たちの側に提示されているのである。